

雛妓

岡本かの子

青空文庫

なに事も夢のようである。わたくしはスピードののろい田舎の自動車で街道筋を送られ、眼にまぼろしの都大路に入った。わが家の玄関へ帰ったのは春のたそがれ近くである。花に匂においもない黄楊つげの枝が触れている呼鈴を力なく押す。

老婢ろうひが出て来て棧ガラスの多い硝子戸ストを開けた。わたくしはそれとすれ違いさま、いつもならば踏石の上ののつて、催促がましく吾妻あづ下駄まげたをかんかんと踏み鳴らし、二階に向つて「帰つてよ」と声をかけるのである。

すると二階にいる主人の逸作は、画筆を擱おくか、うたた寝の夢を搔かきのけるかして、急いで出迎えて呉くれるのである。「無事に

歸つて来たか、よしよし」

この主人に対する出迎えの要求は子供っぽく、また、失礼な所作なのではあるまいか。わたくしはときどきそれを考えないことはない。しかし、こうして貰わないと、わたくしはほんとに家へ歸りついた気がしないのである。わが家がわが家のあたたかい肌身にならない。

もし相手が条件附の好意なら、いかに懐き寄り度たい心をも押し伏せて、ただ寂しく黙っている。もし相手が無条件を許すならば暴君と見えるまで情を解き放つて心を相手に浸み通らせようとす。とかくに人に対して中庸を得てないわたくしの血筋の性格である。生憎あいにくとそれをわたくしも持ち伝えてその一方をここにも

現すのかと思うとわたくしは悲しくなる。けれども逸作は、却つてそれを悦ぶのである。「俺がしたいと思つて出来ないことを、おまえが代つてして呉れるだけだ」

こういうとき逸作の眼は涙を泛べている。

きようは踏石を吾妻下駄で踏み鳴らすことも「帰つてよ」と叫ぶこともしないで、すごすごと玄関の障子を開けて入るわたくしの例外の姿を不審がつて見る老婢をあとにして、わたくしは階段を上つて逸作の部屋へ行つた。

十二畳ほどの二方硝子窓の洋間に畳が敷詰めてある。描きさしの画の傍に逸作は胡坐をかき、茶菓子の椿餅の椿の葉を剥がして黄昏の薄光に頻りに色を検めて見ていた。

「これほどの色は、とても絵の具では出ないぞ」

ひとり言のように言いながら、その黒光りのする緑の椿の葉から用心深くわたくしの姿へ眼を移し上げて来て、その眼がわたくしの顔に届くと吐息をした。

「やつぱり、だめだったのか。——そうか」と言った。

わたくしは頷うなずいて見せた。そして、もうそのときわたくしは敷居の上へじわじわと坐すわり蹲しゃがんでいた。頭がぼんやりしていて涙は零こぼさなかつた。

わたくしは心配性の逸作に向つて、わたくしが父の死を見て心しん悸きを亢こう進しんさせ、実家の跡取りの弟の医学士から瀉しゃ血けつされたことも、それから通夜の三日間静臥せいがしていたことも、逸作には話さ

なかつた。ただ父に就^つては、

「七十二になつても、まだ髪は黒々としていましたわ。死にたくなさそうだったようですわ」

それから、父は隠居所へ隠居してから謙讓を守つて、足袋^{たび}や沓^くつした

下は息子の穿^はき古しよりしか穿かなかつたことや、後のものに迷惑でもかけるといけないと言つて、どうしても後妻の籍を入れさせなかつたことや、多少、父を逸作^{とりな}に取^とり做すような事柄を話した。免作は腕組をして聴いていたが、

「あの平凡で気の弱い大家の旦那^{だんな}にもそれがあつたかなあ。やつぱり旧家の人間というものにはひと節あるなあ」

と、感じて言つた。わたくしは、なお自分の感想を述べて、

「気持ちはこちらで相当しつかりしているつもりですが、身体がいうことを聞かなくなつて……。これはたましいよりも何だか肉体に浸しみ込んだ親子の縁のように思ひますわ」と言つた。

すると逸作は腕組を解いて胸を張りひろ拈ひろげ、「つまらんことを言うのは止せよ。それよか、疲つか勞かれてなければ、おい、これから飯を食くいに出掛でけよう。服装はそれでいいのか」

と言つて立上つた。わたくしは、これも、なにかの場合に機先を制してそれとなくわたくしの頹たい勢せいを支たえて呉くれるいつもの逸作の氣配りの一つと思ひ、心で逸作を伏しか拝かみながら、さすがに氣がついて「一郎は」と、息子のことを訊きいてみた。

逸作はたちまち笑み崩れた。

「まだ帰って来ない。あいつ、研究所の帰りに銀座へでも廻まわって、また鼻つまりの声で友達とピカソでも論じてるのだろう」

弁天堂の梵ほんしやう鐘かねが六時を撞つく間、音があまりに近いのでわたくしは両手で耳を塞ふさいでいた。

ここは不しのばず忍しのの池の中ノ島に在る料亭、蓮中庵の角座敷である。水に架け出されていて、一枚だけ開けひろげである障子の間から、その水を越して池の端のネオンの町並が見み互あせる。

逸作は食卓越しにわたくしの腕を揺り、

「鐘の音は、もう済んだ」と言つて、手を離れたわたくしの耳を

指さし、

「歌を詠む参考に水鳥の声をよく聞いときなさい。もう、鴨も雁かもがんも鶉うも北の方へ帰る時分だから」と言った。

逸作がご飯を食べに連れて行くといつて、いつもの銀座か日本橋方面へは向わず、山の手からは遠出のこの不忍の池へ来たのは理由があつた。いまから十八年前、画学生の逸作と娘歌人のわたくしとは、同じ春の宵に不忍池を観月橋の方から渡つて同じくこの料亭のこの座敷でご飯を食べたのであつた。逸作はそれから後、猛然とわたくしの実家へ乗り込んでわたくしの父母に強引にわたくしへの求婚をしたのであつた。

「あのとき、ここでした君との話を覚えてるか。いまのこの若

き心を永遠に失うまいということだったぜ」

父の死によつて何となく身体に頽勢の見えたわたくしを氣遣い逸作は、この料亭のこの座敷でした十八年前の話の趣旨をわたくしの心に蘇よみがえらせようとするのであつた。わたくしもその誓いは今も固く守っている。だが、

「うっかりすると、すぐ身体が腑ふが抜けたようになるんですもの

——」

わたくしは逸作に護まもられているのを知ると始めて安心して、歿なくなつた父に対する涙をさめざめと流すことが出来た。

父は大家の若旦那に生れついて、家の跡取りとなり、何の苦勞もないうちに、郷党の銀行にただ名前を貸しといただけで、その

銀行の破綻はたんの責を一家に引受け、預金者に対して蔵屋敷まで投げ出したが、郷党の同情が集まり、それほどまでにしなくともということになり、息子の医者いしやの代にはほぼ家運を挽回ばんかいするようになった。

しかしその間は七八年間にもせよ、父のこの失態の悔は強かった。父はこの騒ぎさわぎの間に愛する妻を失い、年頃前後の子供三人を失っている。何れもこの騒ぎさわぎの影響を多少とも受けているであろう。家によってのみ生きている旧家の人間が家を失うことの怯おびえは何かの形で生命に影響しないわけはなかった。晩年、父の技ぎりよ倆うとしては見事過ぎるほどの橋を奔走して自町のために造り、その橋によってせめて家名を郷党に刻もうとしたのも、この悔を

薄める手段に外ならなかった。

逸作は肉親関係に対しては気丈な男だった。

「芸術家は作品と理解者の外に肉親はない。芸術家は天下の孤児だ」そう言って親戚しんせきから孤立を守っていた。しかしわたくしの実家の者に対しては「一たいに人が良過ぎら」と言って、秘ひそかに同情は寄せていた。

「俺はおまえを呉れると先に口を切ったおふくろさんの方が好きなんだが、そうかなあ、矢張り娘は父親に懐くものかなあ」

そう言って、この際、充分に泣けよとばかりわたくしを泣かして置いて呉れた。わたくしはおろおろ声で、「そうばかりでもないんだけど、今度の場合は」と言って、なおも手ハンケチ巾を眼に運

んでいた。

食品が運ばれ出した。私は口に味もない箸はしを採りはじめる。木の芽うにやら海胆うにやら、松露しょうろやら、季節ものの匂においが食卓のまわりに立ち籠こめるほど、わたくしはいよいよ感傷的になった。十八年の永い間、逸作に倣なつてわたくしは実家のいかな盛衰にもあらわな情を見せまいとし、父はまた、父の肩あまに剩ある一家の浮沈に力足らず、わたくしの喜憂に同おじることが出来なかつた。若き心を失うまいと誓ちかつたわたくしと逸作との間にも、その若さと貧しさとかつの故に嘗かつて陥かつた魔界の暗さの一ときがあつた。それを身にも心にも歎なげき余あつて、たつた一度、わたくしは父に取り継つがりに行つた。すると父は玄関に立ちはだかつたまま「え——どうしたのかい」

と空々しく言つて、困つたように眼を外らし、あらぬ方を見た。わたくしはその白眼勝ちの眼を見ると、絶望のまま何にもいわずに、すぐ、当時、灰のように冷え切つたわが家へ引き返したのであつた。

それが、通夜の伽ときの話に父の後妻がわたくしに語つたところに依ると、

「おとうさんはお年を召してから、あんたの肉筆の短冊を何処かで買い求めて来なさつて、ときどき取出しては人に自慢に見せたり自分でも溜ためいき息をついては見ていらつしやいました。わたしがあのお子さんにお仰うしやつたら幾らでもじかに書いて下さいませようにと申しましたら、いや、俺はあの娘には何にも言えない。

あの娘がひとりであれだけになったのだから、この家のことは何一つ頼めない。ただ、蔭で有難いと思つていただけで充分だ」と洩もらしたそうである。

こんな事柄さえ次々に想おもい出されて来た。食品を運んで来る女中は、わたくししたち中年前後の夫妻が何か内輪揉うちわもめで愁歎しゆうたんば場を演じてるとでも思つたのか、なるべくわたくしに眼をつけないようにして襖ふすまからの出入りの足を急いだ。

七時のときの鐘よりは八時の鐘は、わたくしの耳に慣れて来た。いまは耳に手を当てるまでもなく静に聞き過された。一枚開けた障子の隙すきから、漆のような黒い水に、枯れ蓮の茎はすや葉が一層くろくろと水面に伏さつているのが窺のぞかれる。その起伏のさまは、伊

香保の湯宿の高い裏欄干うららんかんから上かみつ毛野けの、下しもつ毛野けのに蟠わだかまる連山の頂上を眺め渡すようだった。そのはろばろと眺め渡して行く起伏の末になると、枯蓮の枯葉は少くなり、ただ撓たわみ曲つた茎だけが、水上の形さながらに水面に落す影もろとも、いろいろに歪ゆがみを見せた〇の字の姿を池に並べ重ねている。わたくしはむかし逸作がこの料亭での会食以前、美術学校の生徒時代に、彼の写生帳を見ると全ぜん頁ページ悉ごとくこの歪んだ〇の字の蓮の枯茎しか写生してないのを発見した。そしてわたくしは「あんたは懶なまけものなの」と訊きいた。すると逸作は答えた。「違う。僕は人生が寂しくつて、こんな楽らく書がきみたいなもの外、スケッチする張合いもないのです」わたくしは訊たずね返した「おとうさんはどうしてらっしやるの。お

かあさんはどうしてらっしやるの。そして、ごきようだいは「逸作は答えた。「それを訊かないで下さい。よし、それ等があるとしたところで僕はやっぱり孤児の気持です」逸作はその孤児なる理由は話さなかつたが、わたくしにはどうやら感じられた。「可^か哀^{わい}そんな青年」

何に愕^{おどろ}いてか、屋後の池の方で水鳥が、くわ、くわ、と鳴き叫び、やがて三四羽続けて水を蹴^けつて立つ音が聞える。

わたくしは淋しい気持に両^{りょうそで}袖で胸を抱いて言った。

「今度こそ二人とも事実正銘の孤児になりましたのね」

「うん、なつた。——だが」

ここでちよつと逸作は眼を俯^{うつむ}けていたが何気なく言った。

「一郎だけは、二人がいなくなつた後も孤児の気持にはさしたくないものだ」

わたくしは再び眼を上げて、蓮の枯茎の〇の字の並べ重なるのを見る。惣忙そうぼうとして脳裡のうりに過ぎる十八年の歲月。

ふと気がついてみると、わたくしの眼に蓮の枯茎が眼について来たのには理由があつた。

夜はやや更ふけて、天地は黒い塀を四壁に立てたように静まり閉すにつれ、真向うの池の端の町並の肉色で涼しい窓々の灯、軒や屋根に色の光りのレースを冠かぶせたようなネオンの明りはだんだん華やいで来た。町並で山下通りの電車線路の近くは、表町通りの熾しれつ烈なネオンの光りを受け、まるで火事の余焰よえんを浴びているよう

である。池の縁を取りまいて若い並木の列がある。町並の家総体が一つの発光体となつた今は、それから射出する夜の灯で、これ等の並木は影くろぐろと生ける人の列のようにも見える。並木に浸み剩つた灯の光は池の水にも明るく届いて、さてはその照り返しで枯蓮の莖の〇字をわたくしの眼にいちじるしく映じさすのであつた。更に思い廻らされて来るこれから迎えようとする幾歳かの茫漠とした人世。

水鳥はもう寝たのか、障子の硝子戸を透してみると上野の森は深夜のようである。それに引代え廊下を歩く女中の足音は忙しくなり、二つ三つ隔てた座敷から絃歌の音も聞え出した。料亭持前の不夜の営みはこれから浮き上りかけて来たようである。そのと

き遠くの女中の声がして、

「かの子さーん」

と呼ぶのが聞えた。それはわたくしと同名の呼名である。わたくしと逸作は、眼を円くして見合い、含み笑いを唇できつと引き結んだ。

もう一度、

「かの子さーん」と聞えた。すると、襖ふすまの外の廊下で案外近く、わざとあどけなく気取らせた小娘の声で、

「はーい。ただ今」

そして、これは本当のあどけない足取りでぱたぱたと駆けて行くのが聞えた。

「お雛妓しやくだ」

「そうねえ」

（筆者はここで、ちよつとお断りして置かねばならない事柄がある。ここに現れ出たこの物語の主人公、雛妓かの子は、この物語の副主人公わたくしという人物とも、また、物語を書く筆者とも同名である。このことは作品に於ける芸術上の議論に疑惑を惹ひき起し易い。また、なにか為めにするところがあるようにも取られ易い。これを思うと筆はちよつと臆おくする。それで筆者は幾度か考え直すに努めて見たものの、これを更かえてしまつては、全然この物語を書く情熱を失つてしまうのである。そこでいつもながらの捨身の勇気を奮い気の弱い筆を叱しかつて進めることにした。よしや

わざくれ、作品のモチーフとなる切情に殉ぜんかなと)

からし菜、細根大根、花菜漬、こういった旬しゅんの青味のお漬物で
ご飯を勧められても、わたくしは、ほんの一口しか食べられな
った。

電気ストーヴをつけて部屋を暖かくしながら、障子をもう一枚
開けひろ拵うろげて、月の出に色も潤うるみだしたらしい不しの忍ぼずの夜の春色で
わたくしの傷心を引立たせようとした逸作も遂ついに匙さじを投げたかの
ように言った。

「それじゃ葬式の日まで、君の身体が持つか持たんか判らないぜ」
逸作はしばらく術すべ無なげに黙っていたが、ふと妙案のように、

「どうだ一つ、さっきのお雛妓ひなこの、あの若いかの子さんでも聘よん

で元氣づけに君に見せてやるか」

逸作は人生の寂しさを努めて紛らすために何か飄逸ひょういつな筆つきを使う画家であつた。都会児の洗練透徹した機智は生れ付きのものだつた。だが彼は邪道に陥る懼れおそがあるとて、ふだんは滅多にそれを使わなかつた。ごく稀まれに彼はそれを画にも処世上にも使つた。意表に出るその働きは水際立つて効を奏した。

わたくしはそれを知っている故に、彼の思い付きに充分な信頼を置くものの、お雛妓を聘ぶなどということは何ほ何でも今夜の場合にはじやらけた気分を感じられた。それに今までそんなことを嘗かつてしたわたくしたちでもなかつた。

「いけません。いけません。それはあんまりですよ」

わたくしの声は少し怒気を帯びていた。

「ばか。おまえは、まだ、あのおやじのこころをほんとによく知っていないのだ」

そこで逸作は、七十二になる父が髪黒々としつつ、そしてなお生に執したことから説いて、

「おやじは古^ふり行く家に、必死と若さを欲していたのだ。あれほど愛していたおまえのお母さんが歿^なくなって間もなく、いくら人に勧められたからとて、聖人と渾名^{あだな}されるほどの人間が直^すぐ若い後妻を貰ったなどはその証拠だ」と言った。

父はまた、長男でわたくしの兄に当る文学好きの青年が大学を出ると間もなく夭死^{ようし}した。その墓を見事に作って、学位の文学士

という文字を墓面に大きく刻み込み、毎日毎日名残り惜しそうにそれを眺めに行った。

「何百年の間、武蔵相模の土に互わたつて逞たくましい埋蔵力を持ちながら、
葡はい松のように横に延びただけの旧家の一族に付いている家霊が、
何一つ世間へ表現されないのをおやじは心魂に徹して歎なげいていた
のだ。おやじの遺憾はただそれ許ばかりなのだ。おやじ自身はそれを
はつきり意識に上のぼす力はなかったかも知れない。けれど晩年には
やはりそれに促なぞされて、何となくおまえ一人の素質を便りにして
いたのだ。この謎はおやじの晩年を見るときそれはあまりに明か
である。しかし望むものを遂におまえに対して口に出して言える
父親ではなかった以上、おまえの方からそれを察してやらなければ

ばならないのだ。この謎を解いてやれ。そしてあのおやじに現れた若さと家霊の表現の意志を継いでやりなさい。それでなけりや、あんまりお前の家のものは可哀相だ。家そのものが可哀相だ」

逸作はここへ来て始めて眼に涙をうか泛べた。

わたくしは「ああ」といって身体を震ゆすつた。もう逸作に反対する勇氣はなかった。わたくしはあまりにも潔癖過ぎる家伝の良心に虐さいなまれることが度々ある。そのときその良心の苛か責やくさえ残らず打明けて逸作に代って担って貰うこともある。で、今の場合にも言った。

「任せるわ。じゃ、いいようにしてよ」

「それがいい。お前は今夜ただ、氣持を取直す工夫だけをしなさい

い」

逸作は、もしこのことで不孝の罰が当るようだったら俺が引受けるなどと冗談のように言つて、それから女中に命じて雛妓かの子を聘へいすることを命じた。幸に、かの女はまだ帰らないで店にいたので、女中はその座敷へ「貰くい」というものをかけて呉くれた。

「今晚は」

ふすま

襖ふすまが開いて閉つて、そこに絢爛けんらんな一つくねの絹布きぬぎれがひれ伏

した。紅紫と卵黄の色彩の喰はみ合あいはまだ何の模様とも判らない。

大きく結んだ背中の帯と、両方へ捌さばき拵ひろげた両袖りょうそでとが、ちよ

つと三番叟さんばそうの形に似ているなど思う途端に、むくりと、その色彩の喰み合いの中から操り人形のそれのように大桃割れに結つて白い顔が擡もたげ上げられた。そして、左の手を膝ひざにしやんと立て、小さい右の手を前方へ突き出して恰あたかも相手に掌の中を検め見さすようなモーシヨンをつけると同時に男の声に擬して言った。

「やあ、君、失敬」

眼を細眼に開けてはいるが、何か眩まぶしいように眼瞼まぶたを震わせ、瞳ひとみの焦点は座敷を抜けて遥はるか池か彼方の水先に放っている。それは小娘ながらも臆おくした人の偽りをいうときの眼の遣やり所に肖にている。かの女はこの所作を終えると、自分のしたことを自分で興きがるように、また抹殺するように、きやらきやらと笑つて立上つた。

きやらきやらと笑い続けて逸作の傍の食卓の角へ来て、ぺたりと坐すわつた。

「お酌しましょうよ」

わたくしはこの間に、ほんの四つ五つの型だけで全身を覆うほどの大矢羽根が紅紫の鹿の子模様で埋り、余地の卵黄色も赤白の鹿の子模様で埋まっているのを見て、この雛妓の所作のどこやら場末臭いもののあるのに比して、案外着物には抱え主は念を入れているなど見詰めていた。

雛妓はわたくしたちの卓上が既に果ものの食順にまで運んでい
るのを見て、

「あら、もうお果ものなの。お早いのね。では、お楊子ようじ」

と言つて、とき色の鹿の子絞りの帯上げの間からやはり鹿の子模様の入っている小楊子入れを出し、扇形に開いてわたくしたちに勧めた。

「お手拭てふきなら、ここよ」

「なんて、ませたやつだ」

座敷へ入つて来てから、ここまでの所作を片かた肘ひじつき、頬ほを支さえて、ちようどモデルでも観察するように眼を眇すめて見ていた逸作は、こう言ふと、身体を揺り上げるようにして笑つた。

雛妓は、逆らいもせず、にこりと媚こびの笑いを逸作に送つて、「でしよう」といつた。

わたくしはまた雛妓に向つて「きれいな衣い裳しようね」と言つた。

逸作は身体を揺り上げながら笑っている間に画家らしく、雛妓の顔かたちを悉しっかい皆観察して取つたらしく、わたくしに向つて、「名前ばかりでなく、顔もなんだかお前に肖てるぜ。こりや不思議だ」と言つた。

着物の美しさに見惚みほれている間にもわたくしもわたくしのどこかの一部で、これは誰やらに、そしてどこやらが肖ていると頻しきりに思い当てることをせつくものがあつた。そしてやつと逸作の言葉でわたくしのその疑いは助け出された。

「まあ、ほんとに」

わたくしの気持は茲ここでちよつと呆あきれ返り、何故か一度、悄しよげ気返りさえしているうちに、もうわたくしの小さい同姓に対する慈し

みはぐんぐん雛妓に浸み向って行つた。わたくしは雛妓に言った。「かの子さん。今夜は、もう何のお勤めもしなくていいのよ。ただ、遊んで行けばいいのよ」

先程からわたくしたち二人の話の遣り取りを眼を大きく見開いてピンポンの球の行き交いのように注意していた雛妓は「あら」と言つて、逸作の側を離れて立上り、今度はわたくしの傍へ来て、手早くお叩儀じぎをした。

「知つてますわ。かの子夫人でいらつしやるんでしよう。歌のお上手な」

そして、世間に自分と同名な名流歌人がいることをお座敷でも聴かされたことがあつたし、雑誌の口絵で見たことがあると言つ

た。

「一度お目にかかり度いと思つてたのに、お目にかかれて」

ここで今までの雛妓らしい所作から離れてまるで生娘のように技巧を取り払つた顔付になり、わたくしを長谷の観音のように恭うややうや々しげに高く見上げた。

「想像よりは少し肥ふとつていらつしやるのね」

わたくしは笑いながら、

「そうお、そんなにすらりとした女に思つてたの」と言うときわたくしの親しみの手はひとりで雛妓の肩にかかつていた。

「お座敷辛いんでしょう。お客さまは骨が折れるんでしょう。夜遅くなつて眠かなくなつて」

それはまるでわたくしの胸のうちに用意されてもしていた聯句のように、すらすらと述べ出された。すると雛妓は再び幼い商売女の顔になって、

「あら、ちつともそんなことなくてよ。面白いわ。——」

とまで言ったが、それではあまり同情者に対してまともに弾ね返し過ぎるとでも思ったのか、

「なんだか知らないけど、あたし、まだ子供でしょう。だから大概のことはみなさんから大目に見て頂けるらしい気がしますよ。それに、^{ねえ}姐さんたちも、もしまじめに考えたら、この商売は出来ないっていうし——」

雛妓は両手でわたくしのあいた方の手を取り、自分の掌を合せ

て見て、僅わずかしかない大ききの差を珍らしがったり、何歳になつてもわたくしの手の甲に出来ている子供らしいおちよぼくぼの窪みを押ししたり、何か言うことのませ方と、することの無邪気さとの間にちぐはぐなところを見せていたが、ふと気がついたように逸作の方へ向いた。

「おにいさん——」

しかしその言葉はわたくしに対して懸念がありと見て取るとかの女は「ほい」といつて直すぐ、先生と言ひ改めた。

「先生。何か踊らなくてもいいの。踊るんなら、誰か、うちで遊んでる姐よさんを聘よんで欲しいわ」

そう言つてつかつかと逸作の方へ立つて行つた。煙草たばこを喫すいな

がらわたくしと雛妓との対談を食卓越しに微笑して傍観していた逸作は、こう言われて、

「このお嬢さんは、売れ残りのうちの姐さんのためにだいぶ幹あつせ旋んするね」

と言葉で逃げたが、雛妓はなかなか許さなかつた。逸作のそばに坐つたかの女は、身体を「く」の字や「つ」の字に曲げ、「ねえ、先生、よつてば」「いいでしょう、先生」と腕に取りすが纏つたり髪の中の指を突き入れたりした。だがその所作よりも、大きな帯や大きな袖に覆われてはいるものの、流石さすがに年頃まえの小娘の肩から胴、脇わき、腰へかけて、若やいだ円味と潤いと生々しさもつが陽炎かげろうのように立騰たちり、立騰のぼつては逸作へ向けてときめきもつ纏

れるのをわたくしは見逃すわけにはゆかなかつた。わたしは幾分息を張り詰めた。

逸作の少年時代は、この上野谷中切つての美少年だつた。だが、鑿^うち出しものの壺^{つぼ}のように外側ばかり鮮かで、中はうつろに感じられる少年だつた。少年は自分でもそのうつろに堪えないで、この界^{かい}隈^{わい}を酒を飲み歩いた。女たちは少年の心のうつろを見過^ごごしてただ形の美しさだけを寵^{ちよう}した。逸作は世間態にはまず充分な放蕩^{ほうとうじ}児^じだつた。逸作とわたくしは幼友達ではあるが、それはほんのちよつとの間で、双方年頃近くになり、この上野の森の辺で初対面のように知り合いになつたときは、逸作はその桜色の顔に似合わず市井老人のようなところになつていた。わたくしが、あ

んまり青年にしては晒さらされ過ぎてると言うと、彼は薩摩さつまがすり縞まがすりの着物に片手を内懐に入れて、「十四より酒飲み慣れてきよ月の月です」と、それが談林の句であるときまでは知らないらしく、ただこの句の捨なげ遣やりのような感慨を愛して空を仰いで言った。

結婚から逸作の放蕩ほうとう時代の清算、次の魔界まがいの一ときが過ぎて、わたくしたちは、息も絶え絶えのところから蘇生そせいの面持で立上った顔を見合した。それから逸作はびびとして笑いを含みながら画作に向う人となった。「俺は元来うつろの人間で人から充みたされる性分だ。おまえは中身だけの人間で、人を充たすように出来る。やつと判った」とその当時言った。

それから十余年の歳月はしずかに流れた。逸作は四十二の厄歳

も滞りなく越え、画作に油が乗りかけている。「おとなしい男、あたくしのために何もかも尽して呉れる男——」だのにわたくしは、何をしてやったろう。小取り廻まわしの利かないわたくしは、何の所作もなく、ただ魂をば、愛をば体当りにぶつけるよりしかたなかった。例えそれを逸作は「俺がしたいと思つて出来ないことを、おまえが代つてして呉れるだけだ」と悦ぶにしても、ときには世の常の良人おっとが世の常の妻にサービスされるあのまめまめしさを、逸作の中にある世の常の男の性は欲していないだろうか。わたくしはときどきそんなことを思つた。

酒をやめてから容ようぼう貌も温厚となり、あの青年時代のきらびやかな美しさは艶消つやけしとなつた代りに、今では中年の威がついて、

髪には一筋二筋の白髪も光りはじめて来ている。

わたくしは、その逸作に、雛妓おしやくしきが頻りにときめかけ、纏もつれかけている小娘の肉体の陽炎かげろうを感じると、今までの愁いの雲はいつの間にか押し払われ、わたくしの心にも若やぎ華やぐ気持の蕾つぼみがちらほら見えはじめた。それは嫉妬しつととか競争心とかいう激しい女の情焰じょうえんを燃えさすには到らなかつた。相手があまりにあどけなかつたからだ。そしてこちらからうち見たところ多少腕白だつたと言われるわたくしの幼な姿にも似通える節のある雛妓の腕働きでもある。それが逸作に纏もつれている。わたくしはこれを眺めて、ほんのり新茶の香りにでも酔つた気持で笑いながら見ている。雛妓は、どうしてもうんと言わない逸作に向つて、首筋の中へ手を

突込んだり、横に引倒しかけたりする。遂に煩しさに堪え兼ねた逸作は、雛妓を弾ねのけて居ずまいを直しながらきっぱり言った。「何と言つても今夜は駄目だ。踊つたり謡つたりすることは出来ない。僕たちはいま父親の忌中なのだから」

その言い方が相当に厳肅だったので、雛妓も諦めて逸作のそばを離れると今度はわたくしのところへ来て、そしてわたくしの膝へ手をかけ、

「奥さんにお願ひしますわ。今度また、ぜひ聘んでね。そして、そのときは屹度うちの姐さんもぜひ聘んでね」

と言つた。わたくしは憫れを覚えて、「えーえー、いいですよ」と約束の言葉を番えた。

すると安心したもののように雛妓はしばらくぼかんとそこに坐すわっていたが急に腕を組んで首をかしげひとり言のように、

「これじゃ、あんまりお雛妓さんの仕事がなさ過ぎるわ。お雛妓さん失業だわ」

と、わたくしたちを笑わせて置いてから、小さい手で膝をちよんと叩たたいた。

「いいことがある。あたし按摩あんま上手よ。よく年寄のお客さんで揉もんで呉くれって方があるのよ。奥さん、いかがですの」

といつてわたくしの後へ廻まわった。わたくしは興きんを催もよほし、「まあまあ先生から」といって雛妓を逸作いつさくの方へ押しやった。

十時の鐘は少し冴さえ返かえって聞きえた。逸作は懐手かいたてをして雛妓に肩

を叩いて貰いながら眼を眠そうにうつとりしている。わたくしはそれを眺めながら、ついに例の癖の、息子の一郎に早くこのくらの年頃の娘を貰って置いて、嫁に仕込んでみたら——そして、その娘が親孝行をして父親の肩を叩く図はおよそこんなものではあるまいかなぞ勝手な想像を働かせていた。

わたくしたちが帰りかけると、雛妓は店先の敷台まで女中に混って送って出て、そこで、おぼろよ朧夜になつた月の夜影を踏んで遠ざかり行くわたくしたちの影に向って呼んだ。

「奥さまのかの子さーん」

わたくしも何だか懐かしく呼んだ。

「お雛妓さんのかの子さーん」

松影に声は距^{へだ}てられながらもまだ、

「奥さまのかの子さーん」

「お雛妓さんのかの子さーん」

ついに、

「かの子さーん」

「かの子さーん」

わたくしは嘗^{かつ}て自分の名を他人にして呼んだ経験はない。いま呼んでみて、それは思いの外なつかしいものである。身のうちが竦^{すく}むような恥かしさと同時に、何だか自分の中に今まで隠れていた本性のようなものが呼出されそうな気強い作用がある。まして、そう呼ばせる相手はわたくしに肖^にて而^しかも小娘の若き姿である。

声もかすかに呼びつれ呼び交すうちに、ふとわたくしはあのお雛妓のかの子さんの若さになりかける。ああ、わたくしは父の死によつて神経を疲労さしているためであらうか。

葬儀の日には逸作もわたくしと一緒に郷家へ行つて呉れた。彼は快く岳父の棺側を護る役まもの一人を引受け、菅笠すげがさを冠かぶり藁草わらぞう履りを穿はいて黙々と附いて歩いた。わたくしの眼には彼が、この親の遺憾としたところのものを受け継いで、まさに闘い出そうとする娘に如何に助太刀すべきか、なおも棺輿の中の岳父にその附囑まごのささやきを聴きつつ歩む昔風の義人の婿の姿に見えた。

若さと家霊の表現。わたくしがこの言葉を逸作の口からしのばず不忍の蓮中庵で解説されたときは、左程のこととも思わなかつた。しかし、その後、きょうまでの五日間にこのエスプリのたちまちわたくしの胎内に蔓はびこり育つたことはわれながら愕おどろくべきほどだつた。それはわたくしの意識をして、今にして夢より覚めたように感ぜしめ、また、新なる夢に入るもののようにも感ぜしめた。肉体のしやうちん惰沈などはどこかへ押し遣られてしまった。食ものさえ、このテーマに結びつけて執拗しつように力強く糸齒で噛み切つた。

「そーら、また、お母さんの凝り性が始まつたぞ」
息子の一郎は苦笑して、ときどき様子を見に来た。

「今度は何を考え出したか知らないが、お母さん、苦しいだろう。

もつとあつさりしなさいよ」

と、はらはらしながら忠告するほどであつた。

葬列は町の中央から出て町を一巡りした。町並の人々は、自分たちが何十年か聖人と渾名あだなして敬愛していた旧家の長老のために、家先に香炉を備えて焼香した。多摩川に沿つて近頃三業組合まで発達した東京近郊のF——町は見物人の中に脂粉の女も混つて、一時祭りのような観を呈した。葬列は町外れへ出て、川に架つた長橋を眺め渡される堤の地点で、ちよつと棺輿とを停めた。

春にしては風のある寒い日である。けれども長堤も対岸の丘もかなり青みわた亘り、その青みの中に柔かいあまうす紅や萌黄もえぎの芽出しの色が一面に漉すき込まれている。漉き込みあま剩つて強い塊の花の色に

吹き出しているところもある。川幅の大半を埋めている小石の大
河原にも若草の叢くさむらの色が和みかけている。

動きの多い空の雲の隙間すきまから飴色あめいろの春陽が、はだらはだらに
射さし下ろす。その光の中に横えられたコンクリートの長橋。父が
家霊けいに対して畢生ひっせいの申訳に尽力して架した長橋である。

父の棺輿はしばし堤の若草の上に佇たたずんで、寂寞せきばくとしてこの橋
を眺める。橋はまた巨鯨の白骨のような姿で寂寞として見返す。
はだらはだらに射さし下ろす春陽の下で。

なべて人の世に相逢あいあうということ、頷うなずき合うということ、それ
等は、結局、この形に於てのみ真の可能なのではあるまいか。寂
寞むむの姿と無むむ々の眼と――。

何の生もない何の情緒もない、枯骨と灰石の対面ではあるが、いのちというものは不思議な経路を取って、その死灰の世界から生と情緒の世界へ生れ代ろうとするもののようなのである。わたくしが案外、冷静なのに、見よ、逸作が慟哭どうこくしている激しい姿を。わたくしが急いで近寄って編笠あみがさの中を覗くと、彼はせぐり上げせぐり上げして来る涙を、胸の喘ぎあえだけでは受け留めかねて、赤くした眼からたらたら流している。わたくしは逸作のこんな泣いたのを見るのは始めてだった。わたくしは袖そでから手巾ハンケチを出してやりながら、

「やつぱり、男は、男の事業慾というものに同情するの」

と訊きくと、逸作は苦しみに締めつけられたように少し狂乱の態

とも見えるほどあたり関わず切ない声を振り絞った。

「いや、そうじゃない。そうじゃない」

そして、わたくしの肩をぐさと掴み、生唾なまつばを土手の若草の上に吐いて喘ぎながら言った。

「おやじが背負い残した家霊の奴め、この橋くらいでは満足しないで、大きな凶体の癖に今度はまるで手も足もない赤児のようなお前によるよると倚よりかかろうとしている。今俺にそれが現実に感じられ出したのだ。その家霊も可哀かわいそうならおまえも可哀そうだ。それを思うと、俺は切なくてやり切れなくなるのだ」

ここで、逸作は橋詰の茶店に向って水を呼んで置いてから、喘ぎを続けた。

「俺が手の中の珠にして、世界で一番の幸福な女に仕立ててみよ
うと思つたお前を、おまえの家の家霊は取戻そうとしているのだ。
畜生ツ。生ける女によつて描こうとした美しい人生のまんだらを
ついに引裂こうとしている。畜生ツ。畜生ツ。家霊の奴め」

わたくしの肩は逸作の両手までがかかつて力強く揺るのを感じ
た。

「だが、ここに、ただ一筋の道はある。おまえは、決して臆おくして
はならない。負けてはならないぞ。そしてこの重荷を届けるべき
ところにまで 驀まっしぐら 地ちに届けることだ。わき見をしては却かえつて重
荷に押し潰つぶされて危ないぞ。家霊は言つてるのだ——わたくしを
若もしわたくしの望む程度まで表現して下さつたなら、わたくしは

三つ指突いてあなた方にお叩頭しぎします。あとは永くあなた方の実家をもあなた方の御子孫をも護りまもましょう——と。いいか。苦惱はどうせこの作業には附ものだ。俺も出来るだけ分担してやるけれどお前自身決して逃れてはならないぞ。苦悩を突き詰めた先こそ疑いもない美だ。そしてお前の一族の家霊くらいおしやれで、美しいものの好きな奴はないのだから——」

読書もそう好きでなし、思索も面倒臭がりやの逸作にどうして、こんないのちの作略に関する言葉が閃ひらめき出るのであろうか。うつろの人には却つていのちの素振りが感じられるものなのだろうか。わたくしはそれにも少し怖れおそを感じたけれども、眼の前の現実まにに襲つて来た無形の大磐石のような圧迫にはなお恐怖を覚えて

慄え上った。思わず逸作に取^{とり}継^{つが}つて家の中で逸作を呼び慣^{なら}わしの言葉の、

「パパウ！　パパウ！」

と泣き喚く顔を懸命に逸作の懐へにじり込ませていた。

「コップを探してましたもんでね、どうも遅くなりました」と、

言つて盆に水を運んで来た茶店の老婆は、逸作が水を飲み干す間、二人の姿をと見こう見しながら、

「そうですね、娘さんとお婿さんとでたんと泣いてお上げなさいましよ。それが何よりの親御さんへのお供養ですよ」

と、さもしたり顔に言つた。

他のときと場合ならわたくしたちの所作は芝居染^じみていて、随

分妙なものに受取られただろうが、しかし場合が場合なので、棺輿の担ぎ手も、親戚しんせきも、葬列の人も、みな茶店の老婆と同じ心らしく、子供たち以外は遠慮勝ちにわたくしたちの傍を離れていて呉くれて、わたくしたちの悲歌劇の一所作が滞りなく演じ終るまで待っていて呉れた。そして逸作が水を飲み終えてコップを盆に返すのをきっかけに葬列は寺へ向って動き出した。

菩提寺ぼだいじの寺は、町の本陣の位置に在るわたくしの実家の殆ど筋向うである。あまり近い距離なので、葬列は町を一巡りしたという理由もあるが、兎とに角かく、わたくしたちは寺の葬儀場へ辿たどりついた。

わたくしは葬儀場の光景なぞ今更、珍らしそうに書くまい。た

だ、葬儀が営まれ行く間に久し振りに眺めた本尊の厨子の脇段に幾つか並べられている実家の代々の位牌に就いて、こどものときから目上の人たちに聞かされつけた由緒の興味あるものだけを少しく述べて置こうと思う。

権之丞というのは近世、実家の中興の祖である。その財力と才幹は江戸諸大名の藩政を動かすに足りる力があつたけれども身分は帯刀御免の士分に過ぎない。それすら彼は抑下して一生、草鞋穿きで駕籠へも乗らなかつた。

その娘二人の位牌がある。絶世の美人だつたが姉妹とも璧だつた。権之丞は、構内奥深く別構へを作り、秘かに姉妹を茲に隠して朝夕あわれな娘たちの身の上を果敢なみに訪れた。

伊太郎という三四代前の当主がある。幕末に際し、実家に遁とんに入ゆうして匿かくまれた多くの幕士の中の一人だが、美男なので実家の娘に想おもわれ、結婚して当主に直った人であつた。生来氣の弱い人らしく、畢生の望みはどうかして一度、声を出して唄うたを謡つてみたいということであつた。或る人が彼に、多摩川の河原へ出て人のいないところで謡いなさいと進言した。伊太郎は勧めに従つてひとり河原に出てはみたものの、ついに口からよう謡い出さずに戻つて来た。

蔵はいろは四十八蔵あり、三四里の間にわが土地を踏まずには他出できなかつたという。天保銭は置き剩あまつて繩に繫いで棟々の床下に埋めた。こたくまういう逞たくましい物質力を持ちながら、何とその持

主の人間たちに憐れにも蝕あわむまれた影の多いことよ。そしてその蝕むしばまれるものの、また何と美しいものに縁があることよ。

逸作はいみじくも指摘した「おまえの家の家霊はおしやれで美しいもの好きだ」と。そしてまた言った。「その美なるものは、苦悩を突き詰めることによつてのみその本体は掴つかみ得られるのだ」と。ああ、わたくしは果してそれに堪え得る女であろうか。

ここに一つ、おかのさんと呼ばれている位牌がある。わたくしたちのいま葬儀しつつある父と、その先代との間に家系も絶えんとし、家運も傾きかけた間一髪の際に、族中より選み出されて危きを既倒に廻まわし止めた女丈夫だという。わたくしの名のかの子は、この女丈夫を記念する為めにつけたのだという。しかも何と、そ

の女丈夫を記念するには、相応ふさぎわしからぬわたくしの性格の非女丈夫的なことよ。わたくしは物心づいてからこの位牌をみると、いつもこの名を愛しその人を尊敬しつつも、わたくし自らを苦笑しなければならなかった。

読経は進んで行った。会葬者は、座敷にも椽えんにも並み余り、本堂の周囲の土に立っている。わたくしは会葬者中の親族席を見廻す。そしてわたくしは茲にも表現されずして鬱うつくつ屈くつしている一族の家霊を実物証明によつて見出すのであつた。

北は東京近郊の板橋かけて、南は相模厚木辺まで蔓まん延えんしてい

て、その土地土地では旧家であり豪家である実家の親族の代表者はことごと悉く集っている。

その中には年々巨万の地代を挙げながら、代々の慣習によつて中学卒業程度で家督をまも護らせられている壮年者もある。

横浜開港時代に土地開発に力を尽し、儒学と俳諧にも深い造詣ぞうげを持ちながら一向世に知られず、その子としてただ老獺ろうかいの一手だけを処世の金科玉条として資産を増殖ろうやしている老爺もある。

蓄ちくしやう妾に精力をスポイルして家産の安全を凶っている地方紳士もある。

だが、やはり、ここにも美に関するものは附いて離れなかつた。

在々所々のそれ等の家に何々小町とか何々乙姫とか呼ばれる娘は随分生れた。しかし、それが縁付くとなると、草莽そうもうの中に鄙ひなび、多産に疲れ、ただどこそこのお婆さんの名に於ていつの間にか生を消して行く。それはいかに、美しいものの好きの家霊をして力を落させ歎なげかしめたことであろう。

葬儀は済んだ。父に身近かの肉親親類たちだけが棺に付添うて墓地に向った。わたくしはこの場面をも悉くわしい説明することを省く。わたくしは、ただ父の遺骸いがいを埋め終つてから、逸作がわたくしの母の墓前に永い間額ぬかづき合掌して何事かを語るが如く祈る

が如くしつつあるのを見て胸が熱くなるのを感じたことを記す。

母はわたくしを十四五の歳になるまで、この子はいじらしいところ^のが退かぬ子だといって抱き寝をして呉^くれた。そして逸作はこの母により逸早く許しを与えられることによつてわたくしを懐にし得た。放蕩児^{ほうとうじ}の名を冒^{おか}しても母がその最愛の長女を与えたことを逸作はどんなに徳としたことであろう。わたくしはただ裸子のように世の中のたつきも知らず懐より懐へ乳房を探るようにして移つて来た。その生みの母と、育ての父のような逸作と、二人はいまわたくしに就^つて何事を語りつつあるのであろうか。

わたくしはその間に、妹のわたくしを偏愛して男の気ならば友人の手紙さえ取上げて見せなかつた文学熱心の兄の墓^もに詣^もで、一

人の弟と一人の妹の墓にも花と香花こうげをわけた。

その弟は、学校を出て船に努めるようになり、乗船中、海の色こうしつの恍惚こうこつに牽ひかれて、海の底に趨はしった。

その妹は、たまさか姉に遇あうても涙よりしか懐かしさを語り得ないような内気な娘であった。生よりも死の床を幾倍か身に相応ふさわしいものに思い做なして、うれしそうに病み死んだ。

風は止んだ。多摩川の川づらには狭霧さぎりが立ち籠こめ生あたたかくたそがれて来た。ほろほろと散る墓畔の桜。わたくしは逸作の腕に支えられながら、弟の医者にちよつと脈を検められ、「生きの身の」と、歌の頭字の五文字を胸に思い泛うかべただけで急いで帰宅くるまの俚くりに乗り込んだだけを記して、早くこの苦渋で憂鬱ゆううつな場面の

記述を切上げよう。

「奥さまのかの子さーん」

夏もさ中にかかりながらわたくしは何となく気鬱きうつ加減で書齋に床は敷かず枕まくらだけつけて横になっていた。わたくしにしては珍らしいことであつた。その枕の耳へ玄関からこの声が聞えて来た。お雛妓しやくのかの子であることが直すぐ思い出された。わたくしは起き上つて、急いで玄関へ下りてみた。お雛妓のかの子は、わたくしを見ると老婢ろうひに、

「それ、ごらんなさい。奥さまはいらっしゃるじやありませんか。

嘘つき」

と、小さい顎あごを出し、老婢がこれに対し何かあらがう様子を尻し眼りめにかけながら、

「あがつてもいいでしょう。ちよつと寄つたのよ」

とわたくしに言った。

わたくしは老婢が見ず知らずの客を断るのは家の慣ならわしで咎とがめ立てするものではありませんと雛妓を軽くたしなめてから、「さあさあ」といつてかの子を二階のわたくしの書齋へ導いた。

雛妓は席へつくと、お土産みやげといつて折箱入りの新橋小菘堂の粟あ餅もちを差し出した。

「もつとも、これ、園遊会の貰いものなんだけど、お土産に融

通しちまうわ」

そういつて、まずわたくしの笑いを誘い出した。わたくしが、まあ綺麗きれいねと言つて例の女の癖の雛妓の着物の袖そでを手に取つてうち見返す間に雛妓はきよう、ここから直ぐ斜裏のK——伯爵家に園遊会があつて、その家へ出入りの谷中住いの画家に頼まれて、姐ねえさん株や同僚七八名と手伝いに行つたことを述べ、歸りにその門前で訊きくと奥さまの家はすぐ近くだといふので、急に來たくなり、仲間に訣わかれて寄つたのだと話した。

「夏の最中の園遊会なんて野暮でしょう。けど、何かの記念日なんだから仕方ないんですつて。幹事さんの中には冬のモーニングを着て、汗だくでふうふう言いながらビールを飲んでた方もあつ

たわ

お雛妓らしい観察を縷々述べて始めた。わたくしがかの女に何か御馳走の望みはないかと訊くと、

「では、あの、ざくざく掻いた氷水を。ただ水というのよ。もし、ご近所にあつたら、ほんとに済みません」

と俄に小心になつてねだった。

わたくしの実家の父が歿なくなつてから四月は経たつ。わたくしのところは、葬儀以後、三十五日、四十九日、百ヶ日と過ぐるにつれ、薄らぐともなく歎きは薄らいで行つた。何といつても七十二という高齢は、訣あきられを諦め易くしたし、それと、生前、わたくしが多少なりとも世間に現している歌の業績を父は無意識にもせよ

家霊の表現の一つに数えて、わたくしは知らなかったにもせよ日頃慰んでいて呉れたということは、いよいよわたくしをして気持を諦め易くした。勿論もちろんわたくしに取ってはそういう性質の仕事

の歌ではなかったのだけれども。それでも、まあ無いよりはいい。

で、その方は気がたいへん軽くなった。それ故にこそ百ヶ日が

済むと、嘗て父かつの通夜過ぎの晩に、不忍池しのばずのいけの中之島の蓮中庵で、

お雛妓かの子につが番えた言葉を思い出し、わたくしの方から逸作を

誘い出すようにして、かの女を聘あげてやりに行つた。「そんな約

束にまで、お前の馬鹿正直を出すもんじやない」と逸作は一応は

わたくしをとめてみたが、わたくしが「そればかりでもなさそう

なのよ」と言うと、怪訝けげんな顔をして「そうか」と言つたきり、一

しよについて行つて呉れた。息子の一郎は「どうも不良マダムになつたね」と言いながら、わたくしの芸術家にしては窮屈過ぎるためにどのくらい生きるに不如意であるかわからぬ性質の一部が、こんなことで捌さばけでもするように、好感の眼で見送つて呉れた。

蓮中庵では約束通りかの女を聘よんで、言葉で番えたようにかの女のうちに遊あそんでいる姐ねえさんを一人ならず聘よんでやった。それ等の姐ねえさんの三味線しやみせんでかの女は踊りを二つ三つ踊つた。それは小娘ながら水際立つて鮮やかなものであつた。わたくしが褒めると、「なにせ、この子の実父というのが少しは名の知れた舞踊家ですから」と姐ねえさん芸妓げいぎは洩もらした。すると、かの女は自分の口へ指を当てて「しつ」といつて姐ねえさんにまず沈黙を求めた。それから芝

居の仕草も混ぜて「これ、こえが高い、ふなが安い」と月並な台せ詞りふの洒落しやれを言った。

姐さんたちは、自分たちをお客に聘かばせて呉れた恩人のお雛妓の顔を立てて、ぼつを合せるようにきやあきやあとかんだか癩か高く笑った。しかし、雛妓のその止め方には、その巫山戯方ふざけかたの中に何か本気なものをわたくしは感じた。

その夜は雛妓おしやくは、貰われるお座敷があつて、わたくしたちより先へ帰った。夏のことなので、障子を開けひろげた窓により、わたくしは中之島が池畔へ続いている参詣道さんけいどうに気をつけていた。松影を透して、女中の箱屋を連れた雛妓は木履ぼっくりを踏石あに宛あて鳴らして帰って行くのが見えた。わたくしのいる窓に声の届きそう

な恰好かつこうの位置へ来ると、かの女は始めた。

「奥さまのかの子さーん」

わたくしは答える。

「お雛妓さんのかの子さーん」

そして嘗てかつの夜の通り、

「かの子さーん」

「かの子さーん」

こう呼び交うところまでに至ったとき、かの女の白い姿が月光の下に突き飛ばされ、女中の箱屋ののしに罵られてるのが聞えた。

「なにを、ぼやぼやしてるのよ、この子は。それ裾すそが引ずつて、だらしがないじゃありませんか」

はつきり判らぬが、多分そんなことを言つて罵つたらしく、雛妓は声はなくして、裾を高々と捲り上げ、腰から下は醜い姿となり、なおも、女中の箱屋に背中をせつかれせつかれして行く姿がやがて丈高い蓮の葉はすの葉群れの蔭で見えなくなつた。

その事が気になつてわたくしは一週間ほど経つと堪え切れず、また逸作にねだつて蓮中庵へ連れて行つて貰つた。

「少しお雛妓マニヤにかかつたね」

苦笑しながら逸作はそう言ったが、わたくしが近頃、歌も詠めずに鬱うつしているのを知つてるものだから、庇かばつてついて来て呉くれた。

風もなく蒸暑い夜だった。わたくしたち二人と雛妓はオレンジ

エードをジョツキーで取り寄せたものを飲みながら頻りに扇風器に当った。逸作がまた、おまえのうちのお茶ひき連を聘よんでやろうかというと、雛妓は今夜は暑くつて踊るの嫌だからたくさんと言つた。

わたくしが臆おくしながら、先夜の女中の箱屋がかの女に慘むじたらしくした顛てんまつ末つひに就とおまわて遠廻たずしに訊ねかけると、雛妓は察して「あんなこと、しよつちゆうよ。その代り、こつちだつて、ときどき絞つてやるから、負けちやいないわ」

と言下にわたくしの懸念を解いた。

わたくしが安心もし、張合抜けもしたような様子を見て取り、雛妓は、ここが言出すによき機会か、ただしは未だしきかと、大

きい袂たもとの袖口そでぐちを荒摺あらづかみにして尋常科じんじょうかの女生徒の運針うんしんの稽古けいこのようなことをしながら考え廻めぐらしていたらしいが、次にこれだけ言った。

「あんなことなんにも辛いつらいことないけど——」

あとは謎なぞにして俯向うつむき、鼻を二つ三つ啜すすった。逸作はひよんな顔をした。

わたくしは、わたくしの気の弱い弱味に付け込まれて、何か小娘わななに罫きを構かまえられたような嫌気きらもしたが、行きがかりの情勢で次を訊きかないではいられなかった。

「他に何か辛いことあるの。言つてごらんなさいな。あたし聴いてあげますよ」

すると雛妓は殆ど生娘の様子に還り、もじもじしていたが、

「奥さんにお目にかかつてから、また、いろいろな雑誌の口絵の花嫁や新家庭の写真を見たりしてあたし今に堅気のお嫁さんになり度たくなつたの。でも、こんなこととしていて、真面目まじめなお嫁さんになれるか知ら——それが」

言いさして、そこへ、がばと突き伏した。

逸作はわたしの顔をちらりと見て、ひよんな顔を深めた。

わたくしは、いくら相手が雛妓でも、まさか「そんなこともありません。よい相手を掴まえて落籍ひかして貰えば立派なお嫁さんにもなれます」とは言い切れなかった。それで、ただ、

「そうねえ——」

とばかり考え込んでしまった。

すると、雛妓は、この相談を諦めてか、あきら身体を擡げると、すーつと座敷を出た。逸作は腕組を解き、右の手の拳で額を叩きながら、「や、くさらせるぞ」と息を吐いてる暇に、洗面所で泣顔を直したらしく、今度入って来たときの雛妓は再びあでやかな顔になつていた。座につくとしおらしく畳に指をつかえ、「済みませんでした」と言った。直ぐそこにあつた絵団扇を執つて、けろりとして二人に風を送りにかかった。その様子はただ鞣された素直な家畜のようになっていた。

今度は、わたくしの方が堪らなくなつた。たまいらつしやいいらつしやいと雛妓を膝ひざもと二元へ呼んで、背を撫なでてやりながら、その希

望のためには絶対に気落ちをしないこと、自暴自棄を起さないこと、じゅんじゅん諄々と言い聞かした末に言った。

「なにかのときには、また、相談に乗ってあげようね、決して心細く思わないように、ね」

そして、そのときであった。雛妓が早速あの小さいけしようかばん化粧鞆したたの中から豆手帳を取り出してわたくしの家の処書きを認めたのは。

その夜は、わたくしたちの方が先へ出た。いつも通り女中に混って敷台へ送りに出た雛妓とわたくしとの呼び交わす声には一層親身の響きが籠こもったように手応えされた。

「奥さまのかの子さーん」

「お雛妓さんのかの子さーん」

「かの子さーん」

「かの子さーん」

わたくしたちは池畔の道を三枚橋通りへ出ようと歩いて行く。重い気が籠った闇夜やみよである。歩きながら逸作は言った。

「あんなに話を深入りさしてもいいのかい」

わたくしは、多少後悔に噛かまれながら「すみません」と言った。しかし、こう弁解はした。

「あたし、何だか、この頃、精神も肉体も変りかけているように、する事、なす事、取り止めありません。しかし考えてみますのに、もしあたしたちに一人でも娘があつたら、こんなにも他所よその娘のことで心を痺しびらされるようなこともないと思ひますが——」

逸作は「ふーむ」と、太い息をしたのち、感慨深く言った。
「なる程、娘をな。」

以前に、こういう段階があるものだから、今もわたくしは、雛妓が氷水でも飲み終えたら、何か身の上ばなしか相談でも切り出すのかと、心待ちに待っていた。しかし雛妓にはそんな様子もなくて、頻りに家の中を見廻みまわして、くくみ笑いをしながら、

「洒落しやれてるけど、案外小つちやなお家ね」

と言つて、天井の板の柁目まさめを仰いだり、裏小路に向く欄干らんかんに手をかけて、直ぐ向い側の小学校の夏季休暇で生徒のいない窓を

眺めたりした。

わたくしの家はまだこの時分は雌伏時代に属していた。嘗て魔界の一ときを経歴したあと、芝の白金でも、今里でも、隠逸の形を取った崖^{がけした}下であるとか一樹の蔭であるとかいう位置の家を選んだ。洞窟を出た人が急に陽の目に当たるときは眼を害する^{おそ}懼れから、手で額上を覆っているという心理に似たものがあつた。今この青山南町の家は、もはや、心理の上にその余翳^{よえい}は除けたようなものの、まだ住いを華やがす気持にはならなかつた。

それと逸作は、この数年来、わたくしを後援し出した伯母と称する遠縁の婦人と共々、諸事を詰めて、わたくしのために外遊費を準備して呉れつつあつた。この外遊ということに就ては、わた

くしが嘗て魔界の一ときの中に於て、食も絶え、親しむ人も絶え、望みも絶えながら、匍はい出し盛りの息子一郎を遊ばし兼ねて、神し氣朦朧んきもうろうとした中に、謡うように言った。

「今に巴里パリへ行つて、マロニエの花を見ましようねえ。シャンゼリゼーで馬車に乗りましようねえ」

それは自分でさえ何の意味か判らないほど切ないまぎれの譚うわご言とのようなものであった。頑是がんぜない息子は、それでも「あい、

——あい」と聴いていた。

この話を後に聴いて、逸作は後悔の念と共に深く心に決したものがあつた。おまえと息子には屹度きつと、巴里パリを見せてやるぞ」と言った。恩怨おんえんの事柄は必ず報ゆる町まち奴風やつこの昔むかし

氣質かたぎの逸作が、こう思い立った以上、いつかそれが執り行われ
ることは明かである。だが、すべてが一家三人珠じゆずつなが数繋りでな
れば何事にも興味が持てなくなっているわたくしたちの家の海外
移動の準備は、金の事だけでも生やさしいものではなかつた。そ
れを逸作は油断なくしか而も事も無げに取計いつつあつた。

「いつ行かれるか判らないけれど、ともかくそのための侘住居わびずまい
よ」

わたくしは雛妓おしやくに訳をざつと説明してから家の中を見廻みまわして、
「ですからここは借家よ」と言つた。

すると雛妓は、

「あたしも、洋行に一緒に行き度たい。ぜひよ。ねえ、奥さん。先

生に頼んでよ」

と、両手でわたくしの袂たもとを取つて、懸命に左右へ振つた。

この雛妓は、この前は真面目まじめな嫁になつて身の振り方をつけ度いことを望み、きようはわたくしたちと一緒に外遊を望む。言うことが移り気で、その場限りの出来心に過ぎなく思えた。やつぱりお雛妓はお雛妓だけのものだ。もはや取るに足らない気がして、わたくしはただ笑つていた。しかし、こうして、一先ず関心を打切つて、離れた目で眺める雛妓は、眼もあやに美しいものであつた。

備後表の青畳の上である。水色ちりめんのごりごりした地へもつて来て、中身の肉体を圧倒するほど沢瀉おもだかとかんぜ水が墨たと代

いしや
 赭いしやの二色で屈強に描かれている。そしてよく見ると、それ等の
 模様は描くというよりは、大小無数の疋田ひつたの鹿の子絞りで埋めて
 あるだけに、疋田の粒と粒とは、配し合い消し合い、衝うち合つて、
 量感のヴァイブレーションを起している。この夏の水草と、渦巻
 く流れとを自然以上に生々としたものに盛り上らせている。

あだかも、その空に飛ぶように見せて、銀地に墨くろぐろと四
 五ひきの蜻蛉とんぼが帯の模様によつて所を得させられている。

滝の姿は見えねど、滝たきつぼ壺すその裾の流れの一筋として白絹の帯上
 げの結び目は、水沫みなわの如く奔騰して、そのみなかみのとうとう々とうとうの音
 を忍ばせ、そこに大小三つほどの水玉模様が撥はねて、物憎さを感じ
 ぜしむるほど気の利いた図案である。

こうは見て来るものの、しかし、この衣裳いしやうに覆われた雛妓の中身も決して衣裳に負けているものではなかった。わたくしは襟元から顔を見上げて行く。

永遠に人目に触れずしてかつ降り、かつ消えてはまた降り積む、あの北地の奥のしら雪のように、その白さには、その果敢はかなさの爲めに却かえって弛ゆるめようもない究極つよの強い張りがあつた。つまんだ程の顎あご尖さきから、丸い顔の半へかけて、人をたばかつて、人は寧むしろそのたばかられることを歡よろこぶような、上質こわくの蠱惑おもかげの影が控目にさし覗のぞいている。澄しても何となく微笑の倂おもかげがあるのは、豊かだがういういしい朱の唇が、やや上弦の月に傾いているせいでもあるうか。それは微笑であるが、しかし、微笑以前の微笑であ

る。

鼻稜びりようはやや顔面全体に対して負けていた。けれどもかかる小娘が今更に、女だてら、あの胸悪い権力や精力をこの人間の中心の目標物に於て象徴せずとも世は過ごして行けそうに思われる。雛妓のそれは愛くるしく親しみ深いものに見えた。

眼よ。西欧の詩人はこれを形容して星という。東亜の詩人は青蓮たんとに譬える。一々の諱いみなは汝の附くるに任せる。希ねがわくばその実を逸脱せざらんことを。わたくしの観みる如くば、それは真夏の際の湖水である。二つが一々主峯の影を濃くひたして空もろ共に凝っている。けれども秋のように冷かではない。見よ、眇視べんし、流目の間に艶あでやかな煙霞えんかの気が長い睫毛まつげを連ねて人に匂においにかかることを。

眉^{まゆ}へ来て、わたくしは、はたと息詰まる気がする。それは左右から迫り過ぎていて、その上、型を当てて描いたもののように濃く整い過ぎていて、何となく薄命を想^{おも}わせる眉であつた。額も美しいが狭^{せま}まつていた。

きょうは、髪の前をちよつとカールして、水髪のように捌^{さば}いた洋髪に結つていた。

心なしか、わたくしが、父の通夜明けの春の宵に不^{しの}忍^{ばず}の蓮中庵ではじめて会つた雛妓かの子とは、殆^{ほとん}ど見違えるほど身体にしなやかな肉の力が盛り上り、年頃近い本然の艶^{いろ}めきが、坐^{すわ}つていだけの物腰にも紛飾を透けて浸^{うる}潤^るんでいる。わたくしは思う、これは商売女のいろ気ではない。雛妓はわたくしに会つてから、

ふとした弾みで女の歎きを覚え、生の憂愁を味い出したのではあるまいか。女は憂いを持つことによつてのみ真のいろ気が出る。

雛妓はいま将に生娘の情に還りつつあるのではあるまいか。わたくしは、と見こう見して、ときどきは、その美しさに四辺を忘れ、青畳ごと、雛妓とわたくしはいつの時世いずくの果とも知らず、たつた二人きりで揺蕩と漂い歩く気持をさせられていた。

雛妓ははじめ商売女の得意とも義務ともつかない、しらばくれた態度で姿かたちをわたくしの見検めるままに曝していたが、夏のたそがれ前の斜陽が小学校の板壁に当つて、その屈折した光線が、この世のものならずフォーカスされて窓より入り、微妙な明るさに部屋中を充たした頃から、雛妓は何となく夢幻の浸蝕を感

じたらしく、態度にもだんだんしやちほこば鯨張った意識を抜いて来て、
持つて生れた女の便りなさを現して来た。眼はうつろに斜め上方
を見ながら謡うような小声でつぶや呟き出した。

「奥さまのかの子さーん」

わたくしは不思議とこれを唐突な呼声とも思わず、木霊こだまのよう
に答えた。

「お雛妓さんのかの子さーん」

二三度、呼び交わしたのち、雛妓とわたくしはだんだん声をひそ幽
めて行つた。

「かの子さーん」

「かの子さーん」

そして、その声がわたくしの嘗て触れられなかつた心の一本の線を震わすと、わたくしは思わず雛妓の両手を執つた。雛妓も同じこころらしく執られた両手を固く握り返した。手を執り合つたまま、雛妓もわたくしも今は惜しむところなく涙を流した。

「かの子さーん」

「かの子さーん」

涙を拭い終つて、息をたつぷり吐いてからわたくしは懐かし気に訊いた。

「あなたのお父さんはどうしてるの。お母さんはどうしているの。そしてきようだいは」

すると雛妓は、胸を前へくたりと折つて、袖をまさぐりながら、

「奥さま、それをどうぞ訊かないでね。どうせお雛妓なんかは、なつたときから孤児なんですもの——」

わたくしは、この答えが殆ど逸作の若いときのそれと同じものであることに思い当り、うたたちようぜん悵然とするだけであつた。そしてどうしてわたくしには、こう孤独な寂しい人間ばかりが牽ひかれて来るのかと、おのれの変な魅力が呪のろわしくさえなつた。

「いいですいいです。これからは、何でもあたしが教えたり便りになつてあげますから、このうちもあんたの花嫁学校のようなつもりで暇ができたなら、いつでもいらつしやいよ」

すると雛妓は言つた。

「あたくしね、正直のところは、死んでもいいから奥さまとご一

緒に暮したいと思ひますのよ」

わたくしは、今はこの雛妓がまことの娘のように思われて来た。わたくしはそれに対して、わたくしの実家の系譜によるわたくしの名前の由来を語り、それによればお互の名前には女丈夫の筋があることを話して力を籠めて言った。

「心を強くしてね。きつとわたくしたちは望み通りになれますよ」
日が陰つて、そよ風が立つて来た。隣の画室で逸作が昼寝から覚めた声が聞える。

「おい、一郎、起きろ。夕方になつたぞ」

父の副室を居間にして、そこで昼寝していた一郎も起き上つたらしい。

二人は襖ふすまを開けて出て来て、雛妓おしやくを見て、好奇の眼を瞠みはつた。
雛妓は丁寧あいさつに挨拶した。

逸作が「いい人でも出来たので、その首尾を奥さんに頼みに来たのかい」などと挿揄からかっている間に、無遠慮に雛妓の身の周りを眺め歩いた一郎は、抛ほうり出すように言った。

「けつ、こいつ、おかあさんを横つぶに潰したような膨はれた顔をしてやがら」

すると雛妓は、

「はい、はい、膨れた顔でもなんでもようございます。いまにお母さんをお願いして、坊っちゃんのお嫁さんにして頂くんですか
ら」

この挨拶には流石さすがに堅気かたがの家の少年は、一ひと堪りたまたもなく捻ひねられ、少し顔を赭あからめて、

「なんでい、こいつ——」

と言っただけで、あとはもじもじするだけになった。

雛妓は、それから長袖ながそでを帯の前に挟み、老婢ろうひに手伝つて金かなだ

盥らいの水や手拭てぬぐいを運んで来て、二階の架け出しの縁側で逸作と息

子が顔を洗う間をまめまめしく世話を焼いた。それは再び商売女の雛妓かえに還つたように見えただけども、わたくしは最早もはやか女の心底を疑うようなことはしなかった。

暗くならないまえ、雛妓は、これから帰つて急いでお風呂に行き、お夜食を済してお座敷のかかるのを待つのだと告げたので、

逸作はなにがしかの祝儀包を与え、車を呼んで乗せてやった。

わたくしたちは、それから息子の部屋へデッサンの描きさしを見に行った。モデルに石膏せっこうの彫像を据えて息子は研究所の夏休みの間、自宅で美術学校の受験準備の実技の練習を継続しているのであった。電灯を捻ひねって、

「ここところは形が違つてら、こう直せよ」

逸作が消しパンで無雑作に画の線を消しにかかるると、息子はその手に取り付いて、

「あ、あ、だめだよ、だめだよ、お父さんみたいにそう無闇むやみに消しちゃ」

消させぬと言う、消すと言う。肉親の教師と生徒の間に他愛も

ない腕づくの教育が始まる。

わたくしはこれを世にも美しいものと眺めた。

それから、十日経^たつても二十日経^たつても雛妓は来ない。わたくしは雛妓が、商売女に相応^{ふさわ}しからぬ考えを起したのを抱え主に見破られでもして、わたくしの家との間を塞^{ふさ}がれてでもいるのではないかと心配し始めた。わたくしは逸作に訴えるように言つた。

「結局、あの娘を、ああいう社会へは永く置いとけませんね」

「という」と逸作は問い返したが、すぐ彼のカンを働かして、

「思い切つて、うちで落籍でもしちまおうと言うのか」

それから眼瞼まぶたを二つ三つうち合わせて分別まを纏まとめていたが、

「よかろう。俺がおまえに娘を一人生ませなかつた詫わびだと思えば何んでもない。仕儀によつたらそれをやろう」

逸作は、こういう桁けたはず外れの企てには興味さえ湧わかす男であつた。「外遊を一年も延ばしたらその位の金は生み出せる」

二人の腹はそう決めて、わたくしたちは蓮中庵へ行つてもう一度雛妓に会つてみることにした。そのまえ、念の為めかの女が教えて置いた抱え主の芸妓家げいぎやへ電話をかけてみる用意を怠らなかつた。すると、雛妓は病氣だといつて実家へ歸つたという。その実家を訊ききただして手紙を出してみると、移転先不明の附箋ふせんが附いて返つて来た。

しかし、わたくしは決して想い^{おも}を絶たなかつた。あれほど契つた娘には、いつかどこかで必ず廻り^{めぐ}合える気がして仕方がないのであつた。わたくしは、その想いの糸を片手に持ちながら、父の死以来、わたくしの肩の荷にかかつている大役を如何なる方図によつて進めるかの問題に頭を費していた。

若さと家霊の表現。この問題をわたくしはチュウインガムのように心の齒で噛^かみ挟み、ぎちやぎちや毎日噛み進めて行つた。

わたくしを後援する伯母と呼ぶ遠縁の婦人は、歌も詠まないわたくしの一年以上の無為な歳月を、もどかしくも亦、解^げせなかつた。これは早く外遊さして刺戟^{しげき}するに如かないと考えた。伯母は、取つて置き^しの財資を貢ぎ出して、追い立てるようにわたくしの一

家を海外に送ることにした。この事が新聞に発表された。

いくつかの送別の手紙の中に、見知らぬ女名前の手紙があった。展ひらくと稚拙な文字でこう書いてあった。

奥さま。かの子は、もうかの子でなくなっています。違つた名前の平凡な一本の芸妓になっています。今度、奥さまが晴れの洋行をなさるに就つき、奥さまのあのときのお情けに対してわたくしは何をお礼にお餞せんべつ別しようかと考えました。わたくしは、泣く泣くお雛妓のときのあの懐かしい名前を奥さまにお返し申し、それとお情けを受けた歳の十六の若さを奥さまに差上げて、幾久しく奥さまのお若くてお仕事遊ばすようお祈りいたします。

ただ一つ永久のお訣わかれに、わたくしがあのとき呼び得なかつた心からのお願いを今、呼ばして頂き度とうございます。それでは呼ばせて頂きます。

おかあさま、おかあさま

むかしお雛妓の

かの子より

奥さまのかの子さまへ

わたくしは、これを読んで涙を流しながら、何か怒りに堪えな

いものがあつた。わたくしは胸の中で叫んだ。「意気地なしの小娘。よし、おまえの若さは貰つた。わたしはこれを使つて、ついにおまえをわたしの娘にし得なかつた人生の何物かに向つて闘いを挑むだろう。おまえは分限ぶげんに應じて平凡に生きよ」

わたくしはまた、いよいよ決心して歌よりも小説のスケールによつて家霊を表現することを逸作に表白した。

逸作はしばらく考えていたが、

「誰だか言つたよ。日本橋の真ん中で、裸で大の字になる覚悟がなけりや小説は書けないと。おまえ、それでもいいか」

わたくしは、ぶるぶる震えながら、逸作に凭もたれて言つた。

「そのとき、パパさえ傍くにいて呉れれば」

逸作はわたくしの手を固く握り締めた。

「俺はいてやる。よし、やれ」

傍にこれを聴いていた息子は、

「こりや凄^{すげ}えぞ」

と囃^{はや}した。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五巻」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

初出：「日本評論」

1939（昭和14）年5月号

※「お雛妓《しやく》」と「雛妓《おしやく》」の混在は、底本通りです。

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2001年4月3日公開

2013年10月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雛妓

岡本かの子

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>